

選評

原 浩史

東寺講堂諸像の機能と『金剛頂経』

原浩史氏の論文は、高田修氏以来の研究蓄積によって定説化した観のあった東寺講堂諸像の図像解釈の問題を再考し、主要尊 15 軀の図像構成と宗教的機能が『金剛頂経』と密接に関係するものであることを説いたものである。

空海の構想にもとづくと考えられる講堂諸像の構成原理については、従来、金剛界法と仁王経法とを折衷し、5 尊ずつ 3 組の主尊像を「三輪身説」によって相互に関連づけたものとみる解釈が、ながく支持されてきた。しかし、「三輪身説」をめぐるのは、仏教教学史の立場より空海没後の成立とする指摘があり、なお未解明な問題が残されている。

こうした研究史上の課題に留意しながら、原氏は、まず、講堂主尊像と仁王経法との関係を示す論拠について再検討をおこなった。五菩薩像中尊・金剛波羅蜜像の失われた右手持物については、詳細な復元的考察を通して、『金剛頂経』系の儀軌に依る「金剛杵」であったことを考証し、最大の論拠とされてきた五大明王像の所依經典については、典拠となる『仁王念誦儀軌』の記述が「三蔵所持の梵本金剛頂瑜伽経」の引用であることを指摘し、構想段階においては広本の『金剛頂経』に基づく造像と認識されていたと論じた。その一方、五仏像と五菩薩中尊像の乗る鳥獣座については、『金剛頂経』系の儀軌を典拠としていることを確認し、以上の論証により、講堂主尊像は、空海が理解するところの広本の『金剛頂経』に基づいて構成されたと結論づけた。

次に、「三輪身説」で解釈されてきた主尊像の構成原理については、五菩薩と五大明王の対応関係に儀軌との不一致が目立つことから、これを退け、『金剛頂経』系の「五部族」思想と奈良時代以来の三尊形式を組み合わせたものとみる新解釈を提示した。

さらに、その機能についても、講堂諸像の供養後まもなく始まった顕教的な宗教儀礼、「伝法会」の形式や目的に関連づけて論及し、その宗教的機能が、「即身成仏」への道程を真言宗僧に開示するとともに、真言宗僧の修学を善因として護国を実現することにあつたと結ぶ。その機能論は、『金剛頂経』の説く教義の実践を大乘的な枠組みによって意味づけたと解するものであり、これまでの仁王経法との関連に立脚した護国的機能論とは一線を画するものといえる。

その論証は、文字資料や密教図像の緻密な分析を積み重ねた、説得力にとむものといえる。ことに、空海の『金剛頂経』観を前提にして、講堂諸尊の構成原理が一元的に『金剛頂経』広本に収斂すると論じた点は、パラダイム転換につながる斬新な仮説を提示したものと見え、今後の美術史研究に新しい視点や方法を提供するものとして注目に値する。

以上により、原浩史氏に『美術史』論文賞を贈り、その功績を称える。